

〈黄帝と老子〉雑観 第10回

天道は循環し、経脈も循環する

『黄帝内经』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ (その4)

『黄帝内经』 研究家 松田博公

ツイート 3

いいね! 7

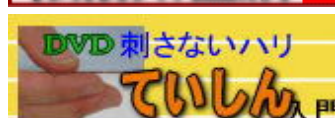
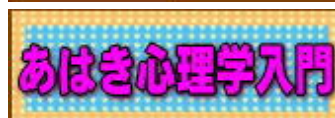
第5回 [勃興する戦国黄老思想 『黄帝内经』への遙かな道](#)第6回 [『黄帝内经』と戦国黄老の気の系譜 『黄帝四経』から『春秋繁露』まで](#)第7回 [『黄帝四経』～『春秋繁露』を貫く機械論的宇宙観](#)[『黄帝内经』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その1\)](#)第8回 [『黄帝内经』には天を畏れる災異思想の痕跡がある?](#)[『黄帝内经』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その2\)](#)第9回 [天地人三才思想の源流は黄老文献にあり](#)[『黄帝内经』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その3\)](#)

さて、前回検討した「天地人三才思想」は、天地宇宙と身体は同型であるとする構造論であった。今回は、天地宇宙と身体は同様に働くとする機能論について考察する。それは、「気は循環し、万物もまた循環する」という法則性である。この理法も同様に『黄帝四経』に発し、先秦から漢代を貫き、ついに『黄帝内经』に至る系譜を形づくっている。現存の『黄帝内经』（『素問』『靈枢』を総称して便宜的にこう呼んでおく）を開く者の印象に強く刻まれる定型句「終わりにて復た始まる」は、既に遙か遠く『黄帝四経』に現れるのである。

「四時（＝春夏秋冬）に度（＝順序）あるは、天地の理なり。日月星辰に数（＝秩序、法則）あるは、天地の紀なり。…一は立て一は廃し、一は生じ一は殺し、四時、代わる代わる正（しゅ）たりて、終わりにて復た始まる」（『経法』論約）

やがて齊国が生む黄老文献『管子』にもこうある。

「天、万物を覆い、寒暑を制し、日月を行（めぐら）し、星辰を次（＝秩序づけ）する、天の常（＝恒常的な働き）なり。之を治むるに理（＝法則性）を以てし、終わりにて復た始まる。主（＝君主）、万民を牧し、天下を



今週号のPRの部屋はこちら

●臨床も経営も何でも話し合えるディスカッション型勉強会 (2014/10/19)

●初学者のための「ていしん入門」セミナー (2015/2/8)

■ヒューマンワールドのセミナー

●[変形徒手矯正術セミナー](#) (2014/12/6)

●[情報コーディネート鍼灸セミナー](#) (2014/12/14)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿

治め、百官を蒞（り、＝臨席させる）する、主の常なり。之を治するに法を以てす。終りて復た始まる。子孫を和し、親戚を属する（＝連携させる）、父母の常なり。之を治むるに義を以てし、終りて復た始まる。敦敬忠信（とんけいちゅうしん、＝誠心誠意敬い、忠義を尽くす）なるは、臣下の常なり。以て其の主（つか）え、終りて復た始まる。親を愛し善く養い、敬を思い教を奉る、子婦の常なり。以て其の親に事え、終りて復た始まる。故に天、其の常を失わざれば、則ち寒暑は、其の時を得、日月星辰は其の序を得る。主、其の常を失わざれば、則ち群臣は其の義を得、百官は其の事を守る。父母、其の常を失わざれば、則ち子孫は和順し、親戚は相驩（かん、＝喜ぶ）す。臣下、其の常を失わざれば、則ち事に過失なく、しかして官職政、治す。子婦、其の常を失わざれば、則ち長幼は理して親疏（しんそ、＝親しい者も疎遠な者も）は和す。故に常（＝不変の法則性）を用いる者は治し、常を失う者は乱れる。天、未だ嘗つて其の所を変じて以て治さざるなり。故に曰く、天は其の常を変えず、と」（形勢解）

永遠に終わることなく循環する。それが天の不変の法則である。それは、王による統治から父母による一族の経営、臣下の忠義の在り方、婦人が親、子どもを愛し養育するに至るまで、当てはまるというのである。この、天の気はやむことなく循環するという理法は、続く秦国の『呂氏春秋』では、「円道」の概念として、いっそう精緻に練り上げられ、「円道」は、天地宇宙の万物に普遍的に妥当する法則性であるとされる。

「太一、両儀（天地のこと）を出し、両儀、陰陽を出し、陰陽変化し、一上一下し、合して章をなす（万物を創る）。渾渾沌沌、離るればまた合し、合すればまた離る。これを天常（＝天地宇宙の法則）という。天地は車輪の如く、終わればまた始まり、極まればまた反り、みな当たらざるなし（＝この法則に、あらゆるものが当てはまる）」（仲夏紀・大楽）

「何をもって天道の円なるを説くや、精気一上一下し、円周複雑として係留するところなし。故に天道は円なりという。……日夜一周するは円道なり。月、二十八宿にやどり、軫（ちん、南方の第7宿）と角（東方の第1宿）と属（つづ）くは円道なり。精、四時にめぐり、一上一下し、各々ともに遇うは円道なり。物動けば萌し、萌して生じ、生じて長じ、長じて大に、大にして成り、成ればすなわち衰え、衰えればすなわち殺（か）れ、殺（か）るればすなわち藏（かくる）るは円道なり」（季春紀・円道）

原稿を募集しています。

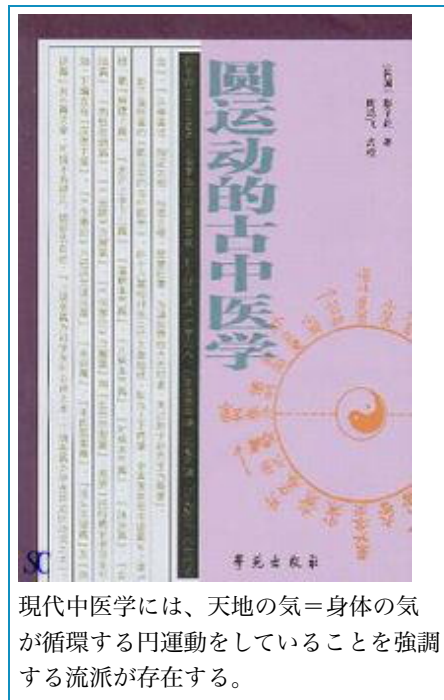
★詳細は≫≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)



現代中医学には、天地の気＝身体の気が循環する円運動をしていることを強調する流派が存在する。

◇前漢期、循環する気の思想は成熟していた

前漢前・中期の『淮南子』『春秋繁露』になると、天地と人事に共通する「終わりにて復た始まる」循環の摂理は、一般常識になっていたようである。『淮南子』天文訓では、天地日月の運行や一年の暦、四季の推移を記述し、これらは「終わりにて復た始まる」と定理として述べている。兵略訓では、天地万物の根源にある「道（タオ）」を、「終わりにて復た始まる」ものとし、加えて恒常的な形を持たず、変化極まりないもので、軍事戦略の究極もそうあるべきだとしている。

「凡そ物、朕（きざし、＝兆し）あり、唯だ道のみ朕なし。朕なき所以は、其の常の形勢なき（＝決まった形がない）を以てなり。輪転して窮りなきこと、日月の運行に象（に）たり。春秋の代謝あるが若く、日月の昼夜あるが若く、終りにて復た始まり、明かにして復た晦（くら）く、能く其の紀（＝法則性）を得る莫し。〔道は〕刑（かたち）を制して刑なし（＝物に形を与えるが、自らは形がない）、故に功成るべし。物を物として物とせられず（物を物たらしめるが、自らは物にならない）、故に勝ちて屈せず。

刑は兵の極なり。刑なきに至りて、之を極むと謂うべし。是の故に、大兵は創（きず）つくなく（＝まことの戦争は敵味方とも傷つかず）、鬼神と通ず（＝闘わずして屈服させるさまは、鬼神に通じる）。五兵は厲（と）がざるに（＝五種の兵器はまだ研ぎ澄まされていないのに）、天下之に敢て当る莫し。建鼓（＝戦陣に使う大太鼓）庫より出さざるに、諸侯、慴慴（しゅうりょう）して其の処に沮胆（そたん）せざる莫し（＝畏れ、意気消沈しない者はない）。故に廟戦（＝戦争に先立ち先祖の廟で作戦を立てる）する者は帝たり、神化する者は王たり。所謂（いわゆる）廟戦とは、天道に法るなり、神化とは、四時に法るなり。政を境内に修めて（国内で政治を行うだけで）、遠方も其の徳を慕い、勝を未だ戦わざるに制して、諸侯も其の威に服するは、内政、治まればなり」

ここでは、「終わりにて復た始まる」という道（タオ）の性質を、確固とした不変の法則性としてではなく、臨機応変で変化極まりない神秘性と解釈している。解釈の幅がこのように広がっていることから、この概念が当時、広く流布し成熟していたことを思わせる。

『春秋繁露』も、「終わりにて復た始まる」無窮性は、「天の道」の本質であり、万物の成長、「人の道」、王者の精神、治世の在り方にもその本質は通貫すると述べている。

「天の道は、終わりにて復た始まる。故に北方は、天の終始する所なり、陰陽の合し別るる所なり。冬至の後、陰俛（ふ）して西入し（＝陰が下降して西方で地下に入ると）、陽仰いで東出し、（陽が上昇して東方から地上に出る）、出入の処、常に相反するなり。多少調和の適、常に相順うなり（＝陰陽の気の量の適合性も相互に相手に順い保たれている）。多きこ

とあるも、しかも溢（あふ）るるなし。少きことあるも、しかも絶えるなし。春夏は陽多くして陰少なく、秋冬は陽少くして陰多し。多少常なくして、未だ嘗つて分れて相散ずることあらざるなり。出入を以て相損益（＝易の用語、バランスを図ること。損益盈虚、そんえきえいきよ）し、多少を以て相既済（きせい、＝易の用語、整うこと）するなり」（陰陽終始）

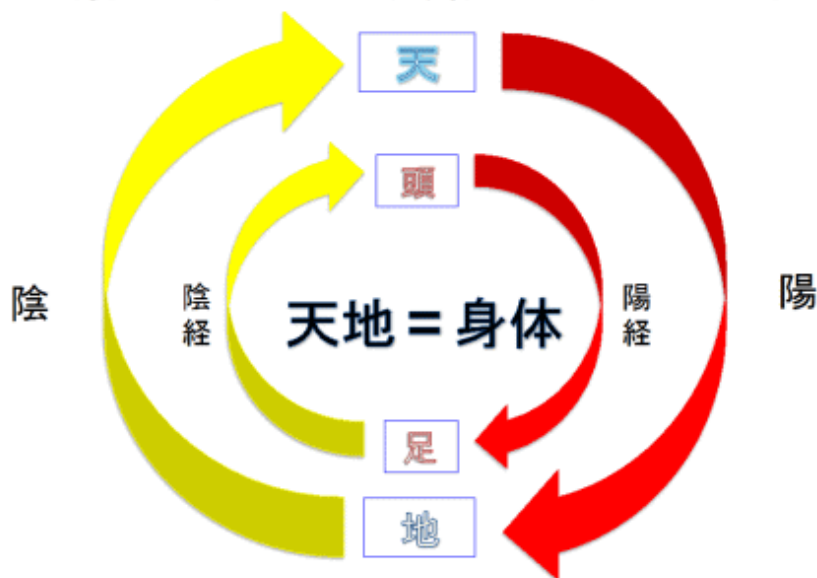
「[万物の] 生育養長（＝成長）は、成りて更に生じ（＝完成したら別のものが更に生じ）、終わりにて復た始まる。其事（＝万物の成長）、利して民を活かす所以（＝手段）のもの、已むなし（＝やむことはない）。天言わずと雖ども、其の贍足（せんそく）せしめん（＝民を充足させよう）と欲するの意、見るべきなり（＝明確に見ることができる）」（諸侯）

「仁の美は天に在り。天は仁なり。天は万物を覆い育て、既に化して之を生み、また養いて之を成す。事功、已むなく、終わりにて復た始まる。凡そ挙げて之に帰して以て人を奉ず。天の意を察するに、窮り極するなきの仁なり。人の命を天に受くるや、仁を天に取りて仁なり。是の故に、父兄子弟の親あり。忠信慈恵の心あり。礼義廉讓の行あり。是非逆順之治あり。文理燦然（さんぜん）として厚く、知広大にして博きことあり。唯だ人道のみ以て天に参ずべしと為す。天は常に天下を愛利するを以て意と為し、養長を以て事と為し、春夏秋冬夏、皆、其の用なり。王者はまた常に天下を愛利するを以て意と為し、一世を安樂にするを以て事と為し、好悪喜怒はその用なり。然れば則ち主の好悪喜怒は、乃ち天の春夏秋冬なり。其れ俱に暖清寒暑にして以て変化して功を成すなり」（王道通三）

◇循環する経脈論は『呂氏春秋』段階から？

『黄帝四経』から延々と『春秋繁露』まで流れ下ったこの「終わりにて復た始まる」の概念は、『黄帝内経』において、医学原理として受け入れられる。いや、このような言い方自体、正しくない。それは、もともと宇宙論と身体論を切り離さない宇宙論的医学（コズミック・メディスン）として誕生した『黄帝内経』の正確な理解をさまたげる俗解と言うべきだろう。「終わりにて復た始まる」循環の法則は、天地陰陽の気の運行の原理であり、即、天地の気が身体内部に感応、浸透したものとしての経脈の運行の原理なのである。そこに断絶はない。後に『黄帝内経』として結実する原初の医学体系が芽生えたとき、「終わりにて復た始まる」の概念も、萌芽していたのだろう。同じ意味の「環（たまき）の端なきが如し」「環周」などの表現も『黄帝内経』には登場する。読者の今後の研究に便利なように、煩を厭わずこれらの語句を列挙しておこう。

陽の気は下がり、陰の気は上がる



「是の故に、天地之動靜、神明は之を綱紀と為す。故に能く以て生長收藏し、終わりにて復た始まる」 (『素問』陰陽応象大論)

「経脈は流行して止まず、環周して休まず」 (『素問』拳痛論)

「精専なるものは、経隧を行き、常に営して已 (や) むこと無く、終りにて復た始まる。是れを天地の紀 (= 紀律) と謂う。故に気は太陰より出で、手の陽明に注ぎ、上行して足の陽明に注ぎ、下行して跗上に至り、大指の間に注ぎ、太陰と合す。上行して……………」 (『靈枢』営気)

「気の行くことなきを得ざるや、水の流るるが如く、日月の行の休まざるが如し。故に陰脈はその蔵を営し、陽脈はその府を営し、環の端なきが如く、その紀を知ることなく、終わりにてまた始まる。その流溢の気は、内は蔵府に漑 (そそ) ぎ、外は腠理を濡 (うるお) す」 (『靈枢』脈度)

「人は気を穀に受け、穀は胃に入り、以て肺に与え伝え、五蔵六府、皆以て気を受く。其の清なる者を営と為し、濁なる者を衛と為し、営は脈中に在り、衛は脈外に在り、営周して休まず、五十にして復た大会す。陰陽相い貫き、環の端無きが如し。衛気は陰を行くこと二十五度、陽を行くこと二十五度、分れて昼夜を為す」 (『靈枢』営衛生会)

「其の気五蔵に内 (い) りて、外に肢節を絡 (まと) う。其の浮気の経を循 (めぐ) らざる者は、衛気たり。其の精気の経を行 (めぐ) る者は、営気たり。陰陽相隨い、外内相貫き、環の端無きが如く、亭亭淳淳 (= 流れ果てない) として、孰 (た) れか能 (よ) くこれを竊 (きわ) めんや。……………能く陰陽十二経を別つ者は、病の生ずる所を知る」 (『靈枢』衛気)

とはいえ、中国古代には、さまざまな宇宙論があった。ということは、これら多次元宇宙のそれぞれを根拠とする複数の宇宙論的医学が存在したと考えてよいだろう。『黄帝内経』時代の医学が、まだ循環する十二経脈

論によって完全に標準化されてはいなかったことは、現存の『靈枢』に、『靈枢』経脈篇に結実する以前の循環しない経脈論、すなわち長沙馬王堆漢墓出土の『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』と同様の一方向の経脈について語る篇があることによって明らかである。それらは、「終わりにて復た始まる」循環の宇宙原理よりも、「天六地五」の数術的宇宙原理へのこだわりを示している。

では、いつのころから、循環する経脈論は優勢になったのだろうか。

『呂氏春秋』のまとめられた戦国最末期、身体に関する知識はかなり蓄積されていた。それを基礎に、次回に検討する、王が身体を健全に治めることがすなわち、国家を安泰に治めることだとする、これまた黄老文献の特色である「治身治国」論が緻密化されていく。『呂氏春秋』には、身体健康のためには、体を動かし体内の精気が流れる状態を保たなければならないという認識が、以下のように記述されている。同じ文章は、江陵張家山出土の『脈書』にも見られ、戦国末には、このような気の身体観が定着していたことが分かる。

「流水腐らず、戸枢蝮（ろう、＝虫食う）せざるは、動けばなり。形氣（＝肉体の気）も亦た然り。形動かざれば則ち精流れず。精流れざれば則ち氣鬱す。鬱、頭に居れば腫をなし、風をなす」（季春紀・尽数）

「凡そ人の三百六十節、九竅五蔵六府、肌膚は其の比ならんことを欲し、血脈は其の通ぜんことを欲し、筋骨は其の固ならんことを欲し、心志は其の和せんことを欲し、精気は其の行（めぐ）らんことを欲するなり。此の若ければ則ち病居る所無くして、悪由りて生ずること無し。病の留まり、悪の生ずるは、精気鬱すればなり」（恃君覽・達鬱）

『呂氏春秋』には、精気は体内を隈なくめぐらねばならず、鬱滞すれば、病や悪の心が生じるという「流れる気」の身体観と、身体気は、天地の気と同じく、「終われば復た始まる」円道の構造にあるという黄老文献が当初から持っていた「循環する気」の身体観が語られている。この二者が交わる地平に、後に『靈枢』経脈論で完成する十二経脈論が誕生することは、たやすく想像できるだろう。陽経は下がり、陰経は上がるという『黄帝内経』の循環する経脈論の出発点は恐らく、『呂氏春秋』段階にあったと思われる。

ツイート 3

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

HOME

